三重県埋蔵文化財調査報告１５７

湯後遺跡発掘調査報告

―宮川村小滝字湯後所在―

１９９７．３

三重県埋蔵文化財センター

序

宮川村は、南伊勢地方を代表する河川である宮川の最上流に位置します。村内をほぼ東西に貫流する宮川は、かつては日本一の清流にも選ばれ、原生林の中を滝と渓流が連続し、雄大な渓谷の景観美を見せる最上流の大杉谷に代表される手着かずの自然が数多く残されています。

今回調査が実施されました多気郡宮川村小滝字湯後地内にある湯後遺跡では、縄文時代及び鎌倉時代を中心とする遺構・遺物を確認いたしました。調査面積こそ狭かったのですが、今回の調査は宮川村初の本格的な発掘調査となり、これまで実態のよく分かっていなかった村の歴史に考古学の分野からのメスを入れることができ、大変意義深いものとなりました。

調査した場所は、残念ながら道路拡幅によって消滅します。地域振興のための道路拡幅も大変重要な事業ですが、その下にはわたくしたちの祖先が残してきた足跡があり、その足跡なくして今日あるいは未来の発展はありません。この成果を基に、地域の方々・ひいては県民の方々にも文化財保護への関心を持って頂けるのであれば、これに勝る喜びはありません。

調査に際しましては、宮川村在住のみなさま方、宮川村教育委員会をはじめ、県土木部道路維持課・松阪土木事務所の関係各位からは、多大なご協力とともに暖かいご配慮を頂くことが出来ました。調査の成果は、ひとえにこれらの方々の文化財保護への深いご理解のもとにあります。文末とはなりましたが、関係各位の誠意あるご対応に心からお礼を申し上げ、冒頭の挨拶といたします。

１９９７年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　　奥　村　敏　夫

例　言

1．本書は、平成８年度国道422号線特定交通安全施設等整備事業（第１種事業）に伴い発掘調査した、三重県多気郡宮川村小滝字湯後地内に所在する湯後遺跡（旧称小滝遺跡）の報告書である。

2．調査は平成８年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

第二係長　杉谷政樹（調整）、主　　事　木野本和之、松葉和也

3．本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行い、以下の者が補助した。執筆及び全体の編集は木野本が行い、写真は木野本と松葉が撮影した。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口　愛、
楠　純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、
田中美樹、豊田幸子、冨楽幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、
西村秋子、長谷いづみ、八田明美、浜崎佳代、早川陽子、松本春美、
松月浩子、三谷朱美、森島公子、柳田敬子（五十音順）

4．調査にあたっては、宮川村小滝周辺在住の方々、宮川村教育委員会及び県土木部道路維持課・松阪土木事務所から多大な協力を得たことを明記する。

5．報告書作成にあたっては、奥義次氏（度会高等学校）、山本良平氏（宮川村教育委員長）、上村安生氏（斎宮歴史博物館）、小林秀氏（博物館設立準備室）のご教示を得た。

6．挿図の方位は、全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏６°20′（昭和61年）である。

7．写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らないかぎり縮尺不同である。

8．本文で用いた遺構表示略記号は、下記による。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　ＳＺ：倒木痕

9．本書で報告した記録及び遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。

10.　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言 …… 1
　1．調査の契機 …… 1
　2．調査の経過 …… 1
　3．調査の方法 …… 2
　4．遺跡の名称について …… 2

Ⅱ　位置と環境 …… 2
　1．位置 …… 2
　2．歴史的環境 …… 3
　3．小結 …… 4

Ⅲ　調査の成果 ～遺構～ …… 6
　1．基本層位及び地形 …… 6
　2．遺構 …… 6

Ⅳ　調査の成果 ～出土遺物～ …… 10
　1．縄文時代の遺物 …… 10
　2．弥生時代の遺物 …… 10
　3．鎌倉時代の遺物 …… 10

Ⅴ　結　語 …… 13
　1．縄文時代 …… 13
　2．鎌倉時代 …… 13
　3．おわりに …… 13

挿　図　目　次

第1図 宮川村位置図…… 3
第2図 遺跡位置図…… 3
第3図 遺跡地形図…… 5
第4図 調査区位置図…… 6
第5図 B地区遺構平面図…… 7
第6図 A地区遺構平面図…… 8
第7図 各地区土層断面図 …… 8
第8図 掘立柱建物ＳＢ12実測図 …… 9
第9図 出土遺物実測図（1） …… 11
第10図 出土遺物実測図（2） …… 12
第11図 出土遺物実測図（3） …… 13

表　目　次

第1表 遺構一覧表 …… 9
第2表 遺物観察表 …… 14

図　版　目　次

表　紙 現地説明会 …… 15
図版1 調査区全景 …… 16
図版2 作業風景（1）（2） …… 17
図版3 A・B地区調査後全景 …… 18
図版4 掘立柱建物ＳＢ12・出土遺物（1） …… 19
図版5 出土遺物（2）・（3） …… 20

Ⅰ 前　言

1．調査の契機

国道422号線は三重県北牟婁郡紀伊長島町と滋賀県大津市を結び、南北に細長い三重県西部の山間部をほぼ南北に縦断する幹線道路である。しかし、山間部を走る道路ということで狭隘な部分が多い上一部には未開通部分も存在し、生活のために自動車を欠くことの出来ない現代にあって極めて不便な状況下にあった。特に今回の調査地の所在する多気郡宮川村では、この道が村の中央を貫く幹線道路として機能しており、道路拡幅による通行困難の解消は緊急の課題となっていた。

このような状況下、平成８年度事業として多気郡宮川村小滝地内の道路拡幅工事が着工の運びとなった。そのために、同地内の文化財調査が必要となったのである。

2．調査の経過

a　調査経過概要

今回の調査地となったのは小滝集落の中央部を走る国道422号線南側の段丘上で、現況は水田及び畑である。過去に弥生土器片・石器・剥片などが表採されており、弥生時代を中心とする遺跡であると推測されていた。そこで、遺跡範囲を確認するために平成7年10月及び11月に三重県埋蔵文化財センター係長・杉谷政樹を担当として事前の試掘調査を実施した。その結果、試掘坑No.４・No.６において遺構・遺物が確認され、事業地内に遺構が存在するものと考えられた。遺跡の取扱については、その保存も含めて松阪土木事務所と協議を重ねた。しかし、この道路は村の幹線道路であり、その拡幅は地域住民の生活及び交通安全確保のため必要不可欠であるとの判断から、やむをえず拡幅部分について発掘調査を実施し記録保存することとした。発掘調査は、県土木部から執行委任を受け、当センター調査第一課主事木野本和之と松葉和也が担当した。

調査は、重機により表土を除去し、その後人力による掘削を行った。幸い、好天にも恵まれ調査は順調に進んだ。この調査は、宮川村初の本格的な発掘調査ということで地域住民の関心も高く、連日のように見学者が訪れた。調査終了直前に村民向けの現地説明会を開催したところ、予想を上回る80名の参加を得た。調査は、平成8年10月28日に開始し同年11月22日に終了した。最終的な調査面積は 350㎡であった。

調査地までの往復時間が長く、途中からは担当者１人の現場となり、疲労の溜まりやすい調査であった。しかし、作業員・地元のみなさんの暖かい御配慮と熱心な意欲に後押しされ、宮川村教育委員会の全面的な御協力を得て無事調査を終了することが出来た。ここに作業員のみなさんの御芳名を記し心からの御礼を申し上げたい。

中川宗夫、中村仁志夫、大原かね子、大原佑子、滝本浩子、西口たみ、橋本さかへ、松林栄、南とし子、宮口さわ

b　調査日誌抄

10月28日　重機による表土掘削開始（松葉和也）。
　　弥生土器片・中世土器片・チャート剥片等出土する。

10月29日　表土掘削続き。土坑・ピットを確認。
　　プレハブ小屋設置。

10月30日　地区杭設定（松葉・林義巳）。

11月１日　道具搬入（木野本和之）。

11月５日　本日より作業員投入。Ｂ地区の壁削り・遺構検出開始。縄文土器・弥生土器・中世土師器・剥片が出土。

11月６日　Ａ地区の壁削り・遺構検出後、Ｂ地区遺構掘削開始。ＳＫ１・ＳＫ２・ＳＫ３より土師器鍋・皿出土。作業中の見学者多数。地元の関心高い。

11月７日　ＳＫ３は風倒木痕を切ること判明。風倒木痕から縄文前期末の土器片出土。

11月11日　本日より松葉は山崎遺跡へ。降雨の為、作業は午前中で中止。

11月12日　Ａ地区掘削を完了。遺構さっぱりせず。遺物も少量。清掃後に遺構写真撮影。

11月13日　今年一番の寒さ。Ｂ地区遺構掘削続き。ＳＫ１拡張部分から、土師器鍋・山皿が出

土。風倒木痕から石鏃・サヌカイト剥片が出土。掘立柱建物１棟確認。本日で遺構掘削終了。近隣５ケ町村の文化財保護委員一行30名が現場を見学。

11月14日　Ｂ地区清掃後、写真撮影。道具類清掃。作業員中川宗夫氏から神滝遺跡出土の異形局部磨製石器の１点を見せられる。（後日行方不明とされていた１点と判明）

11月15日　遺構個別写真撮影。午後から実測準備。領内小全校児童40名が現場見学。

11月16日　地元向け現地説明会開催。予想を上回る80名の参加を得る（木野本・杉谷政樹・松葉）。

11月18日　遺構実測（～19日）。荻原小児童20名が現場見学。

11月19日　Ｂ地区下層調査開始するが遺構・遺物共に確認できず作業中止。

11月22日　午前中、村文化財保護委員山本良平氏と共に中川氏・高橋亀造氏宅を訪問。両氏所蔵の異形局部磨製石器の借用を依頼。午後、松阪土木に現場引き渡す。

11月23日　撤収完了。

c　文化財保護法等に関する諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

・法第５７条の３第１項（文化庁長官あて）
　平成８年10月28日付け道維第1340号
・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
　平成8年11月5日付け教文第 624号
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（大台警察署長あて）
　平成８年12月24日付け教文第 31-29号

3　調査の方法

a　小地区の設定

今回の調査では、調査区内を４ｍ四方の枡目で区切ることによって小地区を設定した。東から数字、北からアルファベットを付け、枡目の北東隅の交点をその小地区の符号とした。なお、この小地区設定は、国土座標軸とは無関係である。

b　遺構図面について

調査区の平面図は1/20で作成している。

4　遺跡の名称について

当遺跡の名称については、試掘実施前までは字名を冠した「小滝」遺跡と認識してきた。しかし、試掘結果によって調査地が小字名を冠した周知の湯後遺跡の範囲に含まれることが判明したため湯後遺跡と名称変更し、以後はこの名称を使用する。

Ⅱ　位置と環境

1　位　置

三重・奈良の県境にある大台ケ原山系は、我が国で最も降水量が多い地域として知られている。宮川はこの山系に源を発し、ゆるやかな蛇行を繰り返しながら東流する。最上流部で大杉谷に代表される雄大なＶ字谷、中流部では河岸段丘、そして下流では肥沃な平野を形成し伊勢湾に注ぐ総延長約93㎞に及ぶ南伊勢地方最大の河川である。

宮川村は、南北に細長い三重県の中央部、多気郡の南西部に位置する。前述の宮川最上流域にあたり、村の周囲は1000m級の山々に囲まれ、村域の97％が山林で占められる。東は大台町、北は飯南郡飯南町・飯高町、南は北牟婁郡紀伊長島町・海山町と度会郡大内山村・紀勢町、西は台高山脈を隔て奈良県吉野郡川上村・上北山村に接する。村域は、東西約35㎞・南北約10㎞・総面積約308㎢で、県下市町村中最大の面積を有する。村域の９割以上が山林で占められるという地形的制約から、集落は村のほぼ中央を東西に貫流する宮川とその支流沿いに開けるわずかな平地に散在している。

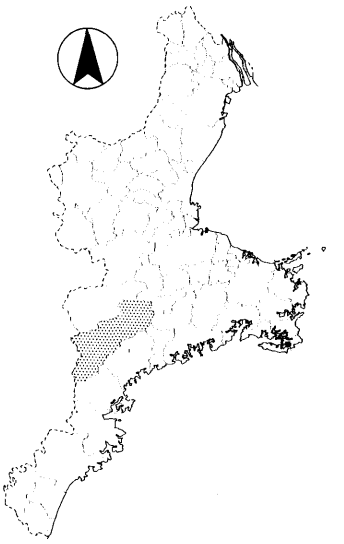
今回調査を実施した湯後遺跡①は、多気宮川村小滝字湯後に所在する。遺跡は、小滝集落の中央部、国道 422 号線南側の標高 137mの宮川左岸の河岸段丘上に位置し、現況は水田及び畑である。東～南側は一段下がった水田を経て急激に宮川に向かって落ち込み、北～西側の集落の背後には急峻な山地が迫る。この周辺地域は1956（昭和31）年の荻原村との合併以前は領内村であり、現在も領内地区と呼称

されている。領内の地名は、かつてこの辺りの集落が上流の滝谷集落に所在する龍翔寺の寺領であったことに由来する[1]。

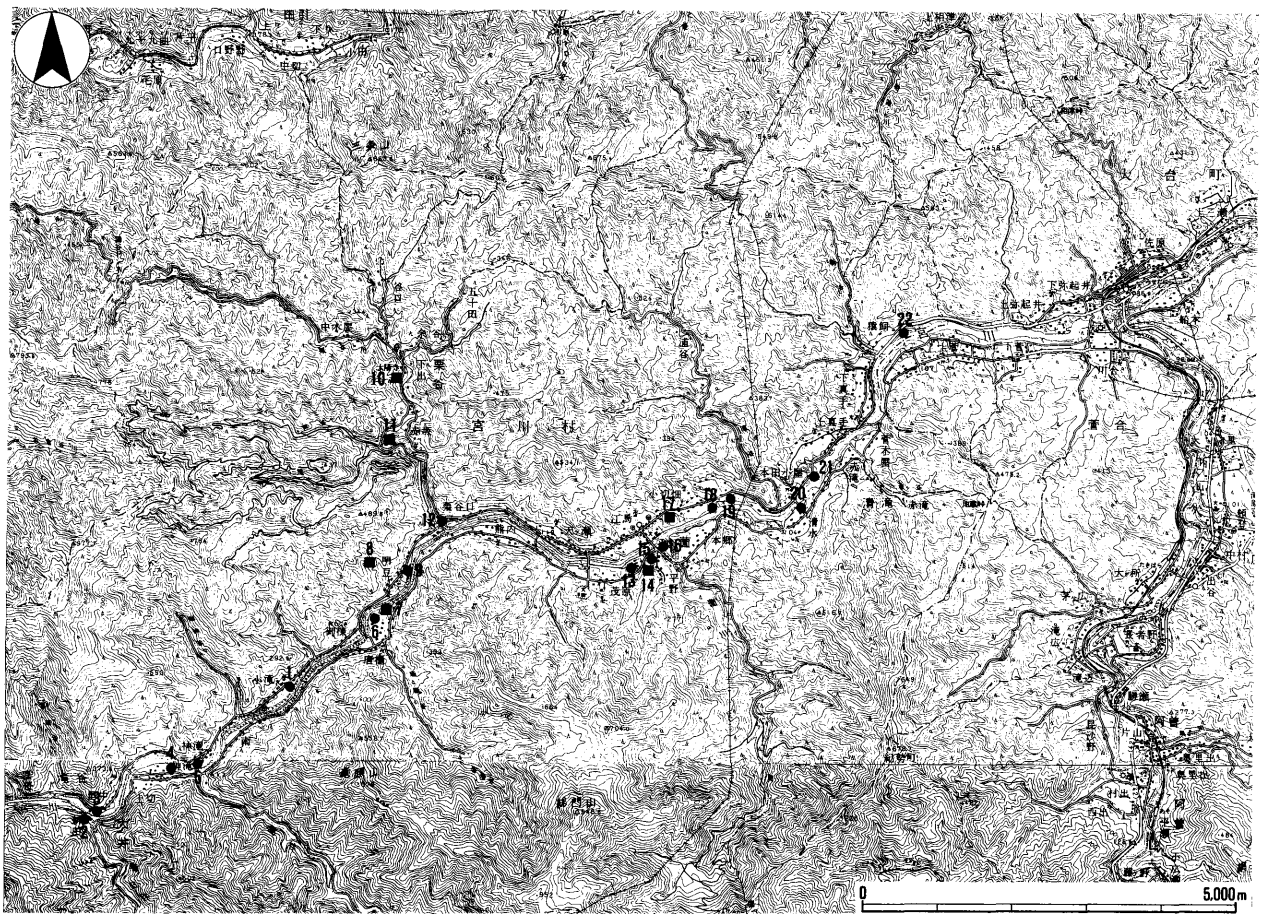
2　歴史的環境

村内の遺跡については、皇學館大學考古学研究会及び奥義次氏の精力的な分布調査により、現在までに縄文～弥生時代のものが１７ケ所確認されている[2]。

しかし、それ以外の時代の遺跡については一部を除き不明な点が多いのが実情である。以下では、縄文時代・弥生時代・中世の概略を記述する。



第１図　宮川村位置図



1．湯後遺跡　2．新田遺跡　3．森下遺跡　4．下モ切遺跡　5．神滝遺跡　6．松崎遺跡
7．唐櫃砦跡　8．明豆城跡　9．中ノ切遺跡　10．栗谷殿切城跡　11．栗谷赤坂城跡　12．不動前遺跡
13．木馬瀬遺跡　14．茂原城跡　15．木馬瀬遺跡東方地点　16．柏尾大道下遺跡　17．江馬城跡
18．浦切遺跡　19．泉沖遺跡　20．浦海道遺跡　21．舟戸前遺跡

第２図　遺跡位置図１：50,000（国土地理院「江馬」「宮前」１：25,000から）

縄文時代

今のところ確実に旧石器時代の遺物は確認されていない。縄文時代になると遺跡は、宮川沿いに多く展開する。以下、順を追って概観していこう。

草創期の遺跡としては、新田遺跡②・浦切遺跡⑱があげられる。これらの遺跡では槍先形の木葉形尖頭器が確認されており、旧石器時代に遡る可能性もある。しかし、同器種の全国的な出土状況から見ておそらくその頃のものと推測されている。早期のものとしては神滝遺跡⑤、不動前遺跡⑫、中ノ切遺跡⑨がある。神滝遺跡は、異形局部磨製石器（通称トロトロ石器）16点が出土したことで全国的に知られるようになった[3]。しかし、それに伴う土器は確認されておらず時期決定の裏付けに欠けるが、押型文土器後半期に特徴的な石器であることから、早期の遺跡であると考えられている。不動前遺跡では、早期後葉～末葉頃と推定される土器片とともに石鏃を中心とする多数の石器類も採集されている。前期は、確実な史料が確認されておらず、これまで空白の時期であった。しかし、今回の湯後遺跡で前期末大歳山式並行期の土器が出土したことから、今後の調査の進展によって同時期の資料の増加が期待される。同じく中期も、確実な史料は確認されていない。ただ、中ノ切遺跡で採集された磨消縄文土器片は当該時期のものである可能性がある。後期に入ると、村内の遺跡数は増加する。森下遺跡③、下モ切遺跡④、神滝遺跡、中ノ切遺跡などで当該時期の土器片が採集されている。また、木馬瀬遺跡⑬では平成5年荻原高等学校寄宿舎増設工事に伴う試掘時に中期末～後期初頭の土器が出土した。また、晩期については、現在のところ確実な資料は確認されていない。

弥生時代

縄文時代に比べると、確認されている遺跡数は少ない。前期の遺跡としては、下モ切遺跡があげられる。採集された当該時期の遺物は極めて少ないが、第Ⅰ様式新段階に属する土器片（いわゆる亜流遠賀川式土器）があり、宮川流域の弥生前期土器としては最上流での確認例である。中期の遺跡としては、湯後遺跡、木馬瀬遺跡、木馬瀬遺跡東方地点⑮がある。特に木馬瀬遺跡は、昭和6年に壺形土器が発見されたことで知られる。ほぼ完形で、第Ⅲ様式に属するものである[4]。また、同遺跡及び同遺跡東方地点からは第Ⅴ様式に属する土器片が多く採集されており、後期に最盛期を迎えるものと考えられる。

その他、松崎遺跡⑥、柏尾大道下遺跡⑯、泉沖遺跡⑲、浦海道遺跡⑳、舟戸前遺跡㉑など石器・剥片等の遺物が採集されている遺跡はあるが、いずれも時期を裏付けるような土器は確認されておらず、確実な時期は不明である。

中世

永禄10（1567）年、織田信長は伊勢攻略を開始。北畠具教は本拠地を大河内城（現松阪市）に移し臨戦態勢をとった。同12（1569）年、信長は大河内城を攻めるが容易に落城せず、結局信長の次男茶筅丸（のちの信雄）が北畠氏の家督を継ぐことを条件に和議を結び、具教は三瀬（現大台町）に居館を移した[5]。勢州軍記に「其頃又具教卿者立城於多気郡三瀬、居住之。故號三瀬御所也。此谷宮川上有大杉山、爲太神宮之奥院。在佐陀宮續熊野十津川吉野河上、而嶮難無雙之地也。有兵亂則爲入此山中也云々」とあり、大杉谷が山間の峻険の地であることから、有事の際の避難場所あるいは脱出ルートと考えられていたと推測される[6]。天正4（1576）年、具教の誅殺後、その弟具親の挙兵の際北畠旧臣もこれに応じ、栗谷、唐櫃、江馬、大杉等の者が蜂起した記録がある[7]。現在のところ、宮川沿いに上流から唐櫃砦跡⑦、明豆城跡⑧、茂原城跡⑭、江馬城跡⑰があり[8]、湯谷峠を経由して櫛田川流域に通じる栗谷川沿いには、栗谷殿切城跡⑩、栗谷赤坂城跡⑪がある[9]。確実な文献がなく断言できないが、これら北畠氏関連城館であると考えられ、この地域が北畠氏の支配下にあり重要な地域であったと考えられる。

その後、宮川村周辺地域は紀州藩領となり明治時代を迎えた。

3　小結

以上、宮川村の歴史的状況を概観してきた。当地は宮川沿いを中心に、遅くとも縄文草創期から人間の活動が各所で営まれ今日に至った。

遺跡は、地形的制約からほとんどが現集落や水田化されている部分と重複しているものと考えられている。また、これまでに発掘調査が実施された遺跡はなく、分布調査の及んでいない地域も多く残され

ている。このような状況から、宮川村の歴史の実態解明については今後の課題であるといえよう。今後の研究の進展による、新たな史料の増加が期待される[10]。

＜註＞

1　山本良平氏（宮川村教育委員長）のご教示によると、唐櫃・南・大井・小滝・神滝・滝谷の各村落が、龍翔寺の寺領とされていたという。

2　遺跡についての記述で特に註記のない場合は、主に下記の文献を参考にした。「第２編通史　第１章原始」（『宮川村史』宮川村、平成３年）。

3　「第２編通史　第１章原始」（『宮川村史』宮川村、平成３年）。津田守一「神滝遺跡出土の異形局部磨製石器について」（『歩跡』第３号、皇學館大學考古学研究会、昭和51年）。

4　註２文献に同じ。

5　「勢州軍記」（『続群書類従』第二十一輯上合戦部、続群書類従完成会、1931年）。

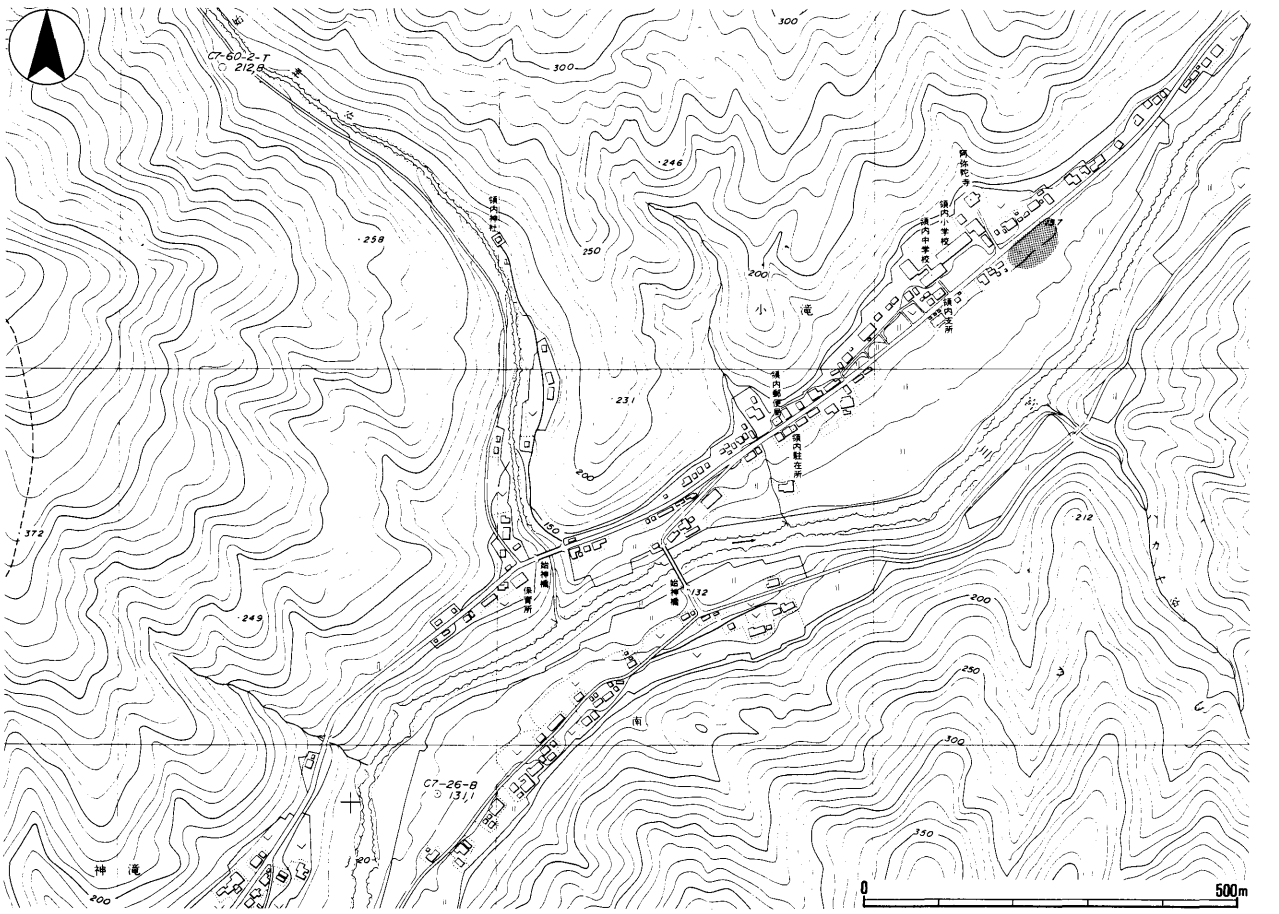
6　註５文献に同じ。現在の県境である台高山脈を越えると吉野への最短ルートである。現在は道の表示はないが、地図上には峠を示す地名表示がある。地元にも道の存在を窺わせる伝承があり、過去に吉野へ通じるルートが存在した可能性がある。

7　註５文献に同じ。

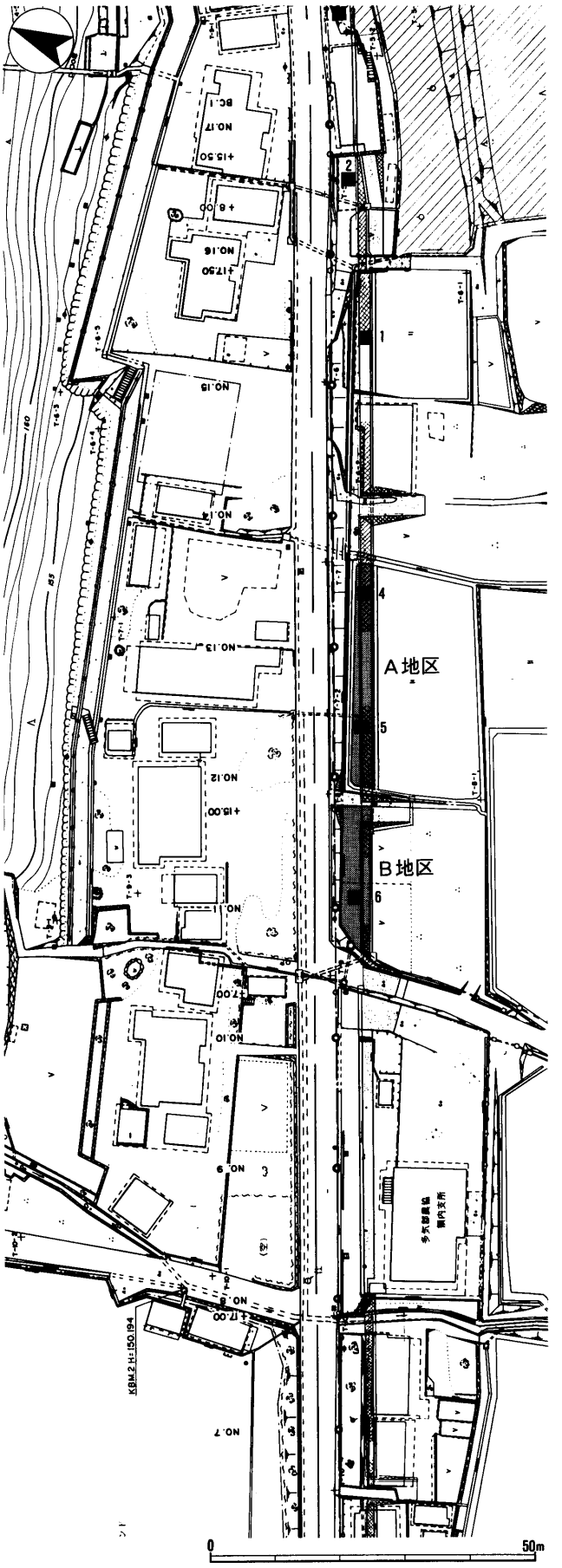
8　『三重の中世城館』（三重県教育委員会、1976年）。

9　註８文献に同じ。

10　平成８年度、宮川村教育委員会の下ノ平遺跡の試掘調査でピット・土坑等の遺構と剥片・土師器等の遺物が確認された。



第３図　遺跡地形図１：10,000（宮川村森林基本図1:5,000から）



第４図　調査区位置図　１：2,000　■＝試掘坑

Ⅲ　調査の成果

～層位と遺構～

１　基本的層位及び地形

調査区は、現農道を挟んで２ケ所に別れており、層位的にも若干の違いがある。（第４図）

Ａ地区　現地表面から第１層：暗褐色粘質土（耕作土），第２層：青灰色粘土（床土）、第３層：褐色砂質土（鉄分沈着）、第４層：褐色砂質土となり、第４層を遺構検出面とした。

Ｂ地区　Ａ地区から一段上がった畑部分である。部分的に厚さは異なるが、第１層：暗灰色粘質土（置土）、第２層：褐色土、第３層：黄褐色土となり、第３層を遺構検出面とした。いずれの層にも礫が混入している。調査区西側は盛土が厚く、調査区の西にある農協支所の工事に伴って置土されたものであろう。（第７図）

調査区は、現道直下で比高差が約３ｍある。しかし、現道は段丘面を埋め立てて造成されており、段丘崖は現道を挟んだ反対側の民家の庭のあたりにあった。したがって、この比高差は人工的なものであり、調査区は宮川によって形成された中位段丘上に立地する。周辺の地形は、集落背後の山地から宮川に向かって緩やかに傾し、わずかな下位段丘を経て急激に宮川に落ち込んでいる。

２　遺構

今回の調査によって検出した遺構は、大きくは縄文時代、鎌倉時代に分けられる。主な遺構は、Ｂ地区で検出された。ここではＢ地区の遺構を中心に記述する。なお、遺構の概略については、遺構一覧表（第１表）を参照されたい。

ａ　縄文時代の遺構

縄文時代の遺構には、倒木痕がある。当該時期のものとしては唯一である。

倒木痕ＳＺ４　Ｂ地区中央西よりの南壁際で検出した。黒褐色系土を基本埋土とする。鎌倉時代の土坑ＳＫ３と重なる。遺構肩が不揃いであることから倒木痕であると考える。埋土中からは前期末と考えられる土器片、剥片、石鏃が出土している。

b　鎌倉時代の遺構

この時代の遺構には、土坑がある。

土坑ＳＫ１　Ｂ地区中央部東寄りの北壁際で検出した。調査区北壁に向かって拡がっており部分的に拡張した。直径 1.4 m、検出面からの深さ0.6 m。平面形は、ほぼ円形である。暗褐色系土を基本埋土とする。土層断面観察から、この土坑は第２層を切り込んでおり、当時の生活面は第２層上面であると考えられる。この土坑の埋土中から土師器鍋・皿、山皿が出土している。

土坑ＳＫ２　SK1の西側で検出した。直径 0.9 m、検出面からの深さ 0.4 m。平面形は、ほぼ円形である。褐色系土を基本埋土とし、埋土中から土師器鍋、青磁椀が出土している。

土坑ＳＫ３　前述のＳＺ４と切り合う形で検出した。黒褐色系土を基本埋土としており検出当初の切り合い関係がはっきりせず、一括のものとして掘削してしまった。推定の直径 1.5m、検出面からの深さ 0.1m。既に検出時点で人頭大の大礫がいくつか露出し、集石遺構の可能性も考えた。しかし、検出状況を見ると、これらの礫は投棄されたものであると考えられる。その周辺の埋土からは、土師器鍋・皿の細片が出土している。

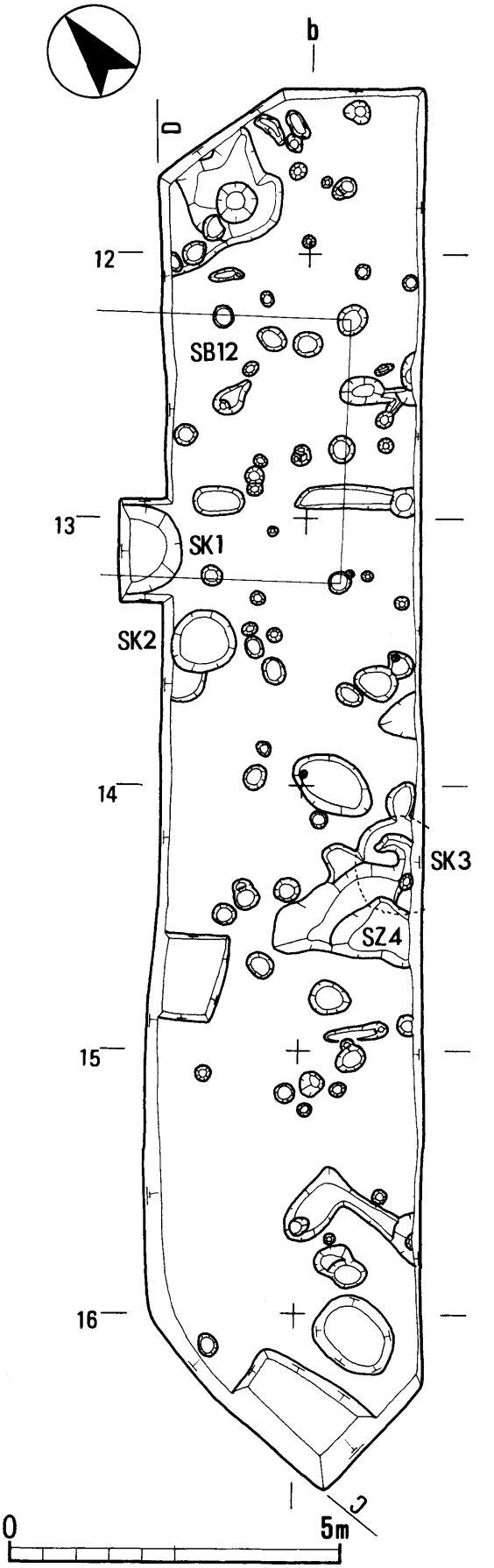
c　時期不明の遺構

時期不明の遺構としては、掘立柱建物がある。

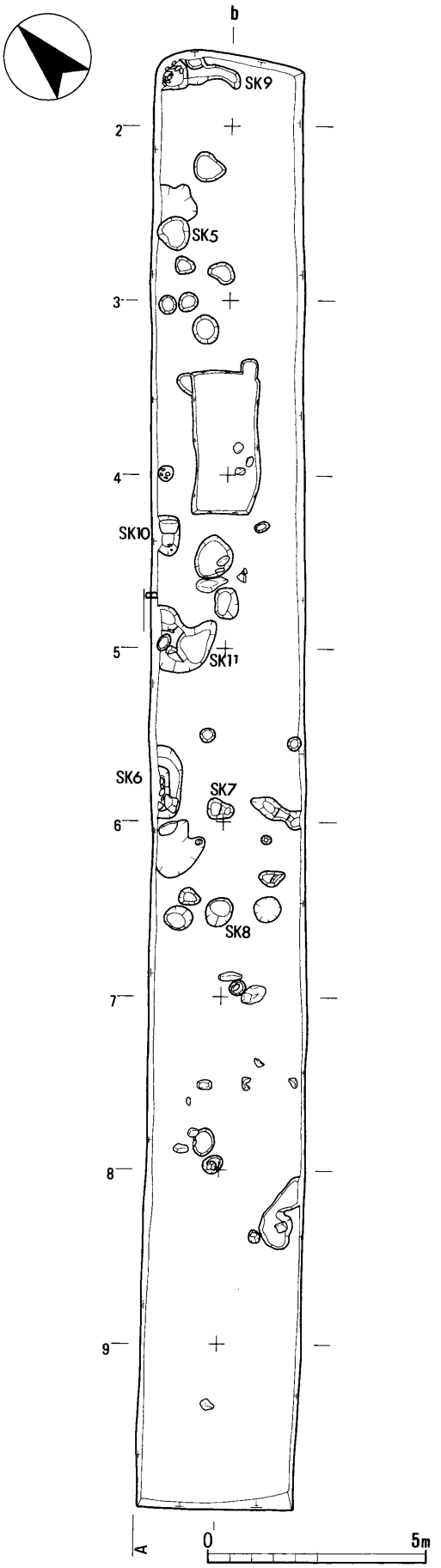
掘立柱建物ＳＢ12　Ｂ地区東寄り北側で検出した。東西２間（約４m）、南北２間以上と想定され、北側は調査区外に及んでいるものと推定される。南北方向の軸線は、Ｎ 32°Ｗである。柱間は、東西方向・南北方向ともに約２mの等間である。ピットからの出土遺物がほとんどなく、時期は不明とせざるをえないが、埋土のあり方等から判断して鎌倉時代頃のものであろう。

d　その他の遺構

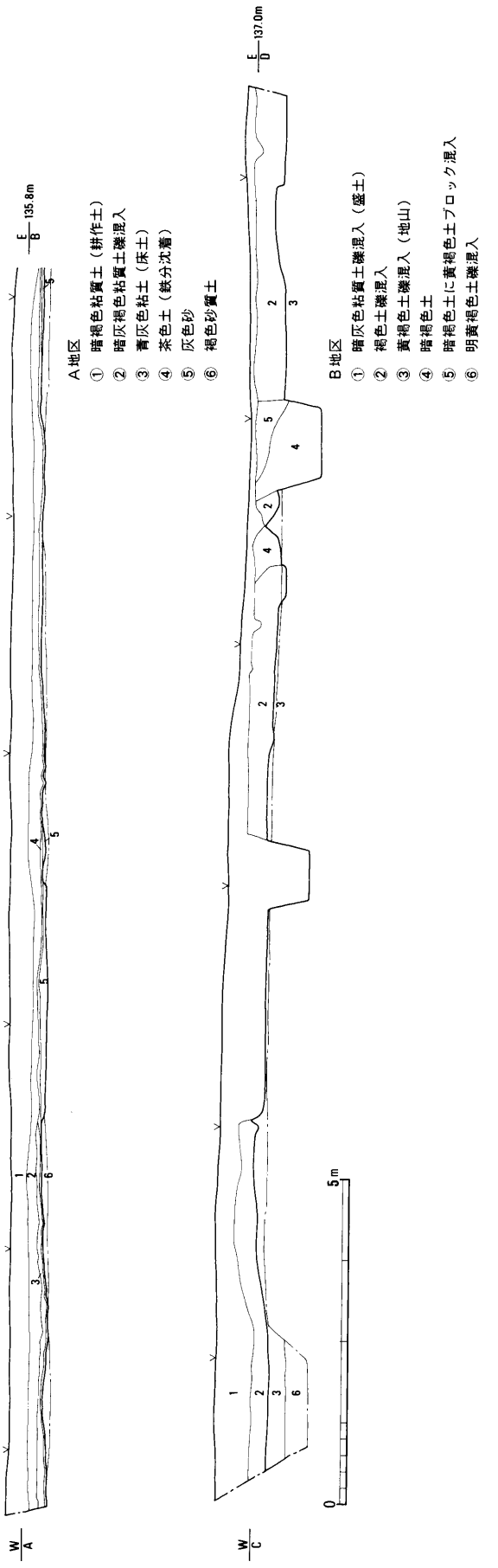
Ａ地区のピット・土坑は、残りが悪かった。遺物も、中・近世の土師器、陶器の破片が少量出土したのみであった。その後、Ａ地区部分は以前桑畑で、水田化する為削平されていることが判明した[1]。したがって、遺物が出土し遺構番号を付けたものの中には、攪乱も含まれる可能性がある。



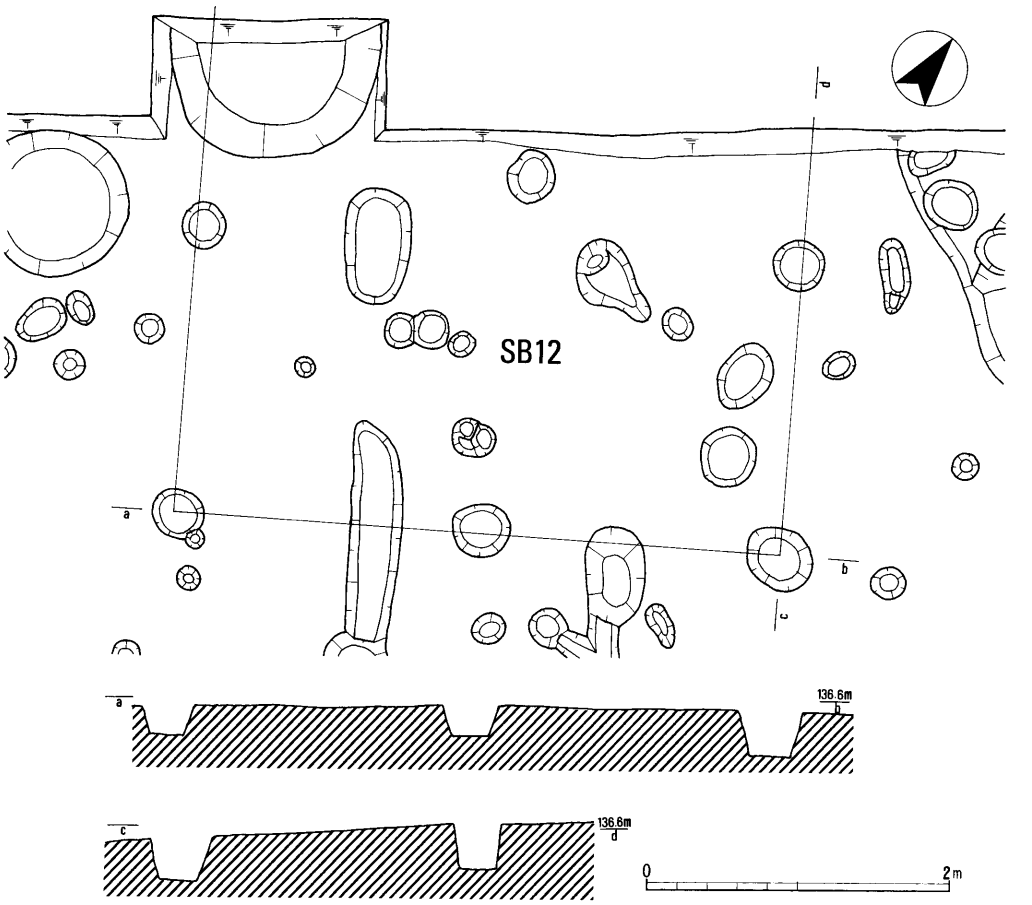
第５図　Ｂ地区遺構平面図　1:100



第６図　Ａ地区遺構平面図　1:150



第７図　調査区土層断面図　1:100



第8図　SB12実測図　1:50

遺構番号	小地区	旧　称	時　期	特　徴・形　状・計測数値など
ＳＫ１	Ｂ地区	――	鎌　倉	直径 1.4m，深さ 0.6m。
ＳＫ２	Ｂ地区	――	鎌　倉	直径 0.9m，深さ 0.4m。
ＳＫ３	Ｂ地区	――	鎌　倉	直径 1.5m，深さ 0.1m（推定値）。
ＳＺ４	Ｂ地区	ＳＫ３	縄　文	縄文前期末の土器含む。大歳山式並行。
ＳＫ５	Ａ地区	――	――	直径 0.8m，深さ0.26m。
ＳＫ６	Ａ地区	――	――	長径 1.6m，深さ0.22m。
ＳＫ７	Ａ地区	――	――	長径 0.6m，深さ 0.1m。
ＳＫ８	Ａ地区	――	――	直径 0.6m，深さ0.11m。
ＳＫ９	Ａ地区	――	――	直径 0.8m，深さ 0.1m。
ＳＫ10	Ａ地区	――	――	長径 0.9m，深さ0.27m。
ＳＫ11	Ａ地区	――	――	直径 1.1m，深さ0.17m。
ＳＢ12	Ｂ地区	――	鎌　倉？	東西２間（４ｍ）、南北２間以上。

第１表　遺構一覧表

Ⅳ　調査の成果　～出土遺物～

今回の調査で出土した遺物は、遺物整理箱に換算して７箱と少ない。以下、それぞれの遺物の概要を記す。個々の遺物の詳細は、遺物観察表（第２表）を参照されたい。

１　縄文時代の遺物

風倒木痕ＳＫ４から出土したものが中心であるが、一部に他の遺構出土のもの、表土掘削時に出土したもの、調査区周辺で表採したものがある。

ａ　石器

１・２は敲石である。１はＳＫ１掘削時、２は表土掘削時に出土した。長軸部両端に敲打痕が認められる。ＳＫ１出土のものは、混入であろう。３は凹石で、平坦な部分両面に窪みがある。敲石としても利用されており、３ヵ所に敲打痕が認められる。４の石錘は、長軸の両端を打ち欠いている。１～４はいずれも河原の自然石を利用している。５～７は石鏃である。５はＳＺ４からの出土、６・７は調査区付近で表採。５はチャート製の凹基無茎鏃で、側縁部は緩やかな弧を描くように膨らみ、表裏から交互に剥離が行われたため鋸歯状を呈する。表裏とも２次加工が施されるが、腹部は縁辺部のみの調整である。背面側がやや甲高であるが、完成品であろう。６もチャート製の凹基無茎鏃。調査区近くの水田で表採。側縁が大きく抉れ脚部で再び膨らむ。片側の脚が欠損し左右非対象ではあるが、表裏とも２次調整が行き届いた完成品である。７はサヌカイト製。調査区横の排土で表採。片面に未調整部分を多く残し、未製品であると考えられる。

ｂ　縄文土器

ここに図示したものは、大半がＳＺ４から出土した。いずれも胎土には１～３㎜の砂粒を含み、色調はにぶい黄橙系及び灰褐系のもので、小片が多い。ここでは断面図と拓本を示す。８～13及び15は口縁部である。これらは、内面あるいは内外面が肥厚する特徴を持つ。また、13のように内外面に縄文、突帯、キザミ等を施すものがある。突帯は断面が三角形状を呈し、工具による刺突が施される。前期末の大歳山式に類似する点が多く、それに並行するものと考えられる[2]。その他は体部の破片である。炭化物や煤が付着するものもある。大半は外面に縄文が施され、内面はナデで調整されている。また、器壁が薄手のものが多い。詳細は遺物観察表を参照されたい。

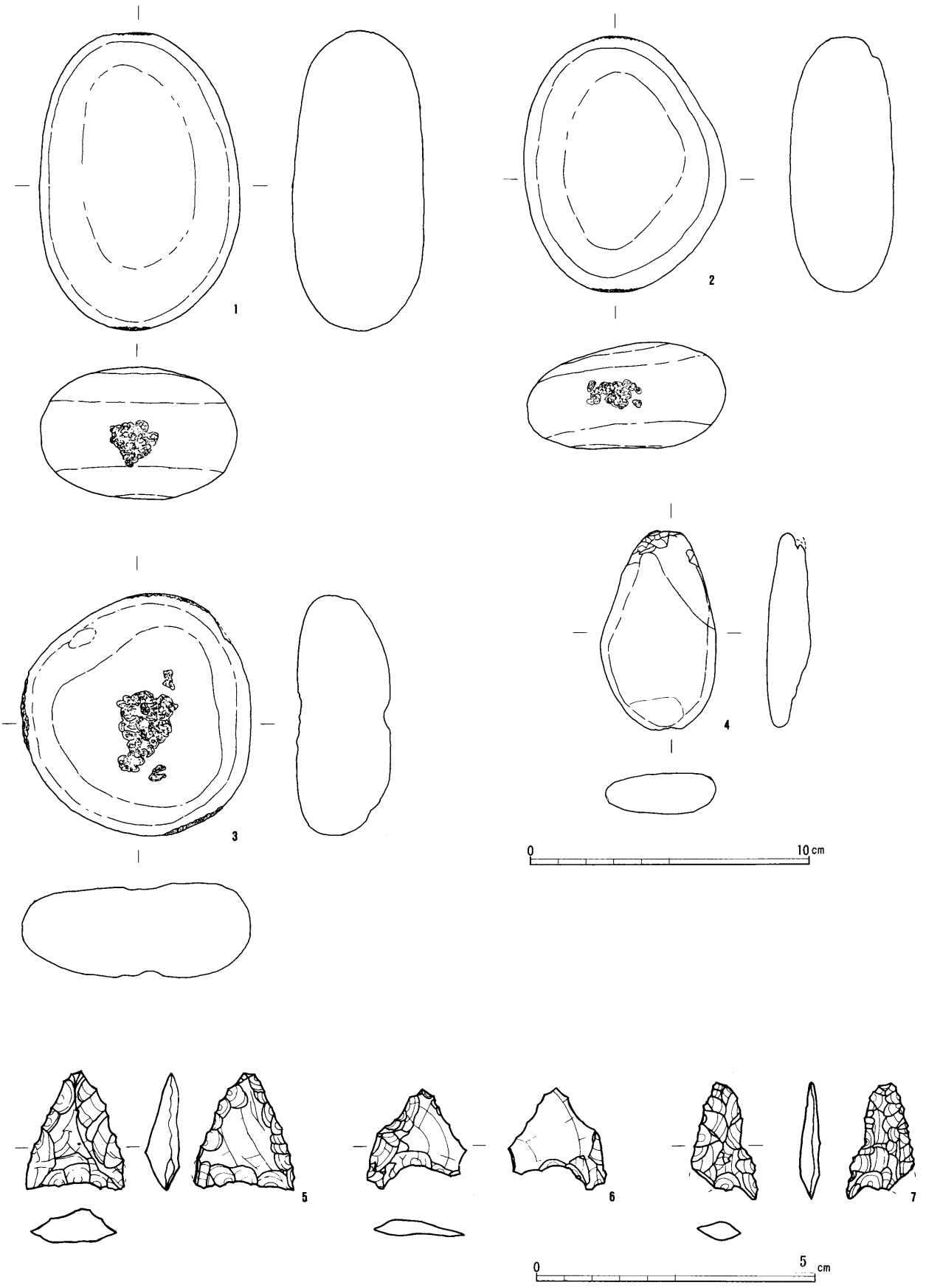
２　弥生時代の遺物

確実に弥生土器として提示できるのはこの１点である。27は、いわゆる「大和甕」の系統に属する口縁部である。口縁端部には凹線、口縁端部外面にはキザミの入った凸帯を巡らせる。外面は頸部に縦方向のハケメが、体部に横方向のヘラミガキが施される。内面は、横方向のヘラミガキが施される。外面に煤が付着しており、煮炊きに使用されていたものであろう。大鼻遺跡のＳＸ３から類似の破片が出土している[3]。上村安生氏の編年案のⅣ－２に相当し、弥生時代中期後葉のものである[4]。

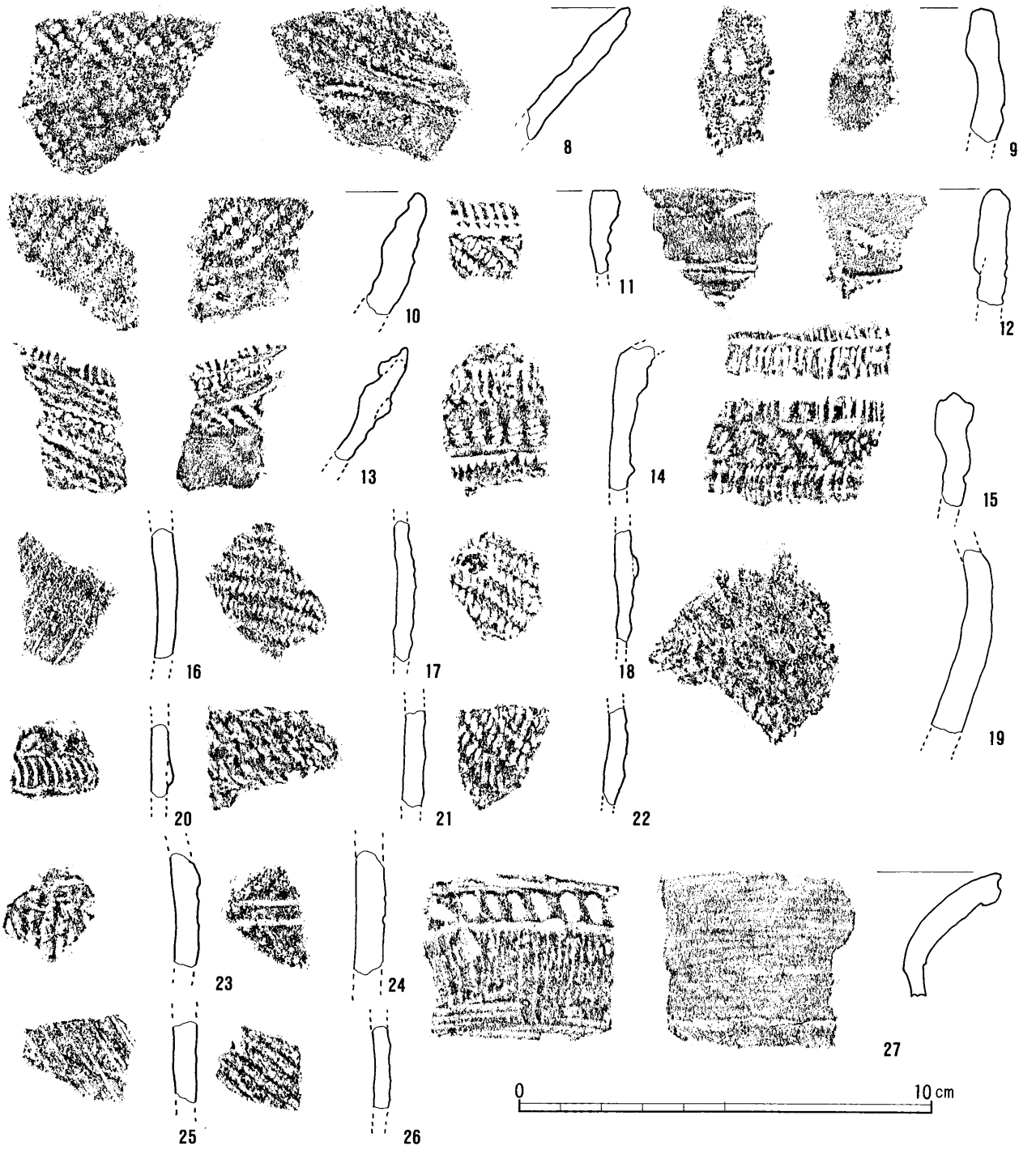
３　鎌倉時代の遺物

この時代の遺物には、土師器類、陶器類、磁器類がある。

28～30は土師器鍋である。28･29は口縁部に折り返しが見られ、その上面にヨコナデが施される。そのため、口縁部断面形が三角形状を呈する。口縁部から頸部にかけての屈曲が明瞭なのに対し、頸部から体部にかけての曲線は緩やかである。29は外面に煤が付着する。また、頸部内面にもハケメを施す。南伊勢系土師器第２段階ｃ型式に相当し、13世紀後葉～14世紀前葉のものである[5]。30は口縁部折り返し部分のヨコナデが強く、その部分が浅く窪んだ状態である。また、頸部には指オサエ痕がはっきりと観察できる。口縁部の形態は南伊勢系土師器第１段階ｂ型式に相当するが、体部にハケメが入る。この形態は前述の第２段階に並行することが知られているので、これも13世紀後葉～14世紀前葉のものであろう[6]。31は青磁椀である。高台部分のみ出土したため、詳しくは述べられないが、30と共にＳＫ2から出土しており、同時期の輸入陶磁であろう。周辺に打ち欠いた加工痕が認められるので、おそらく加工円盤であろう。32は山皿である。体



第９図　出土遺物実測図(1)　１～４は１：２、５～７は１：１

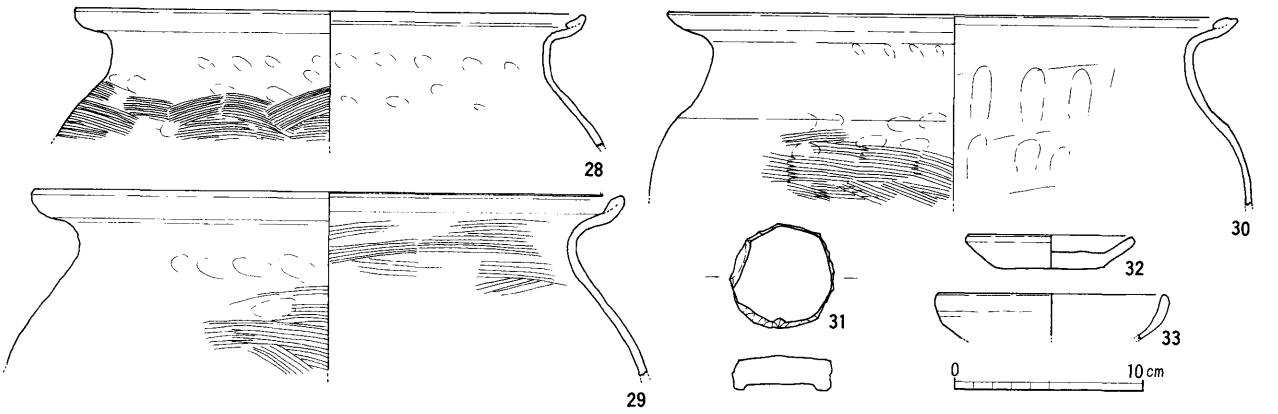


第10図　出土遺物実測図（2）2：3

部が直線的に開き、器高は低く偏平である。その特徴から、藤沢編年の尾張型第6形式に相当し、13世紀前半のものであろう[7]。33は土師器皿である。口縁部はヨコナデ、他はナデを施す。外面には粘土接合痕が認められる。小片のため断言できないが、13世紀代のものであろう。

＜註＞

1　地元の方のご教示による。
2　奥義次氏のご教示による。
3　山田猛他『大鼻遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1994年）。
4　上村安生「壺形土器を中心とした凹線紋出現前後の土器について」（『研究紀要　第4号』、三重県埋蔵文化財センター、1995年）。
5　伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol.1、三重歴史文化研究会、1990年）。
6　註5文献に同じ。
7　藤澤良祐「山茶椀研究の現状と課題」（『研究紀要　第3号』、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。



第11図　出土遺物実測図(3)　1：4

V　結　　語

今回の調査では、縄文時代の遺物及び鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。最後に本報告書のまとめとして、今回の調査で明らかになったことについて述べたい。

1　縄文時代

今回の調査で、倒木痕ＳＺ４から前期末大歳山式に並行する土器が発見され、この地域も県内各地の前期遺跡と同様に、西日本的な北白川下層式土器群の影響下にあったことが判明した。これによって、これまで遺跡自体がすっかり姿を消す状況であった宮川上流部においても人々の生活が営まれていたという確証を得ることが出来た。残念ながら調査区内で遺構を確認することは出来なかった。しかし、周辺の地形は遺跡が立地するための好条件が揃っており、今後の発掘調査によって遺構が確認される可能性は十分にある。

2　鎌倉時代

明確に時期が特定できたのは土坑３基のみであるが、掘立柱建物も同時期である可能性が高い。Ⅲ－１でも述べたように、現在の国道422号線は旧地形の上に盛土して造成されている。検出された遺構が現道側に集中する傾向やＳＫ１や掘立柱建物のあり方からみて、湯後遺跡の中心は現集落と重複するものと推測される。

3　おわりに

以上、湯後遺跡の調査によって得られたことを述べてきた。大きくは、当地に縄文時代前期には周辺で生活が営まれていたこと、鎌倉時代にも集落が形成されていたということであろうか。ただし、今回の調査区はまさに遺跡の縁辺部に相当し、遺跡の性格等について多くを語ることはできない。

しかし、限られた範囲ではあったが宮川村の歴史に考古学のメスを入れ、その実態に迫る手掛かりが得られたことにこの調査の重要性があると認識されよう。

No.	実測No.	器　種	遺構名等	取上時の名称等	法　量 (cm)	調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調	残存度	備　考
1	005－02	敲石	SK1	SK1	長：10.6 短：7.0	自然石を利用	―――	－	―――	完　存	長軸部両端に敲打痕。
2	005－04	敲石	重機掘削	重機掘削	長：9.1 短：7.7	自然石を利用	―――	－	―――	完　存	長軸部両端に敲打痕。
3	005－01	凹石	SZ4	SK3	長：8.4 短：8.2	自然石を利用	―――	－	―――	完　存	3方向に敲打痕、偏平部両面に窪み
4	005－03	石錘	重機掘削	重機掘削	長：7.0 短：4.1	自然石を利用	―――	－	―――	ほぼ完存	長軸部両端に打欠痕。
5	006－01	石鏃	SZ4	SK3	長：2.10 幅：1.80	凹基無茎鏃。表裏から交互に剝離、2次調整あり。	チャート	－	―――	ほぼ完存	完成品。
6	007－01	石鏃	排　土	排　土	長：1.78 幅：1.80	凹基無茎鏃。片側脚部欠損。表裏とも2次調整あり。	サヌカイト	－	―――	脚部片側欠損	未製品。
7	006－02	石鏃	表　採	表　採	長：2.15 幅：1.20	片面、未調整部分多く残る。	チャート	－	―――	脚部片側欠損	完成品。
8	003－06	縄文土器口縁部	SZ4	SK3	―――	外：縄文 内：縄文、斜行沈線	やや粗1㎜の小石含む	並	外：灰褐 内：にぶい橙	小　片	
9	003－05	縄文土器口縁部	SZ4	SK3	―――	外：刺突？ 内：ナデ	やや粗1㎜の小石含む	並	にぶい橙	小　片	
10	003－07	縄文土器口縁部	SZ4	SK3	―――	外：縄文 内：縄文、ナデ	1～3㎜の小石含む	並	灰褐	小　片	
11	004－01	縄文土器口縁部	SZ4	SK3	―――	外：キザミ、縄文 内：ナデ？	やや粗1㎜の小石含む	並	にぶい橙	小　片	
12	003－04	縄文土器口縁部	SZ4	SK3	―――	外：ヘラミガキ、沈線 内：ヘラミガキ	やや粗1～2㎜の小石含む	並	にぶい褐	小　片	
13	003－08	縄文土器口縁部	SZ4	SK3	―――	外：キザミ、条痕、突帯、刺突 内：キザミ、刺突縄文、ナデ	やや粗1㎜の小石含む	並	にぶい黄橙 黄褐	小　片	
14	004－04	縄文土器体部	SZ4	SK3	―――	外：キザミ、縄文 内：ナデ	やや粗1㎜の小石含む	並	外：灰褐 内：にぶい黄褐	小　片	
15	003－03	縄文土器口縁部	SZ4	SK3	―――	外：キザミ、縄文 内：沈線、キザミ、ナデ	やや粗1㎜の小石含む	並	にぶい黄橙	小　片	
16	004－11	縄文土器体部	SZ4	SK3	―――	外：条線 内：ナデ	やや粗1㎜の小石含む	並	にぶい黄橙	小　片	内面に煤付着。
17	004－05	縄文土器体部	SZ4	SK3	―――	外：縄文 内：ナデ	やや粗2㎜の小石含む	並	外：にぶい褐 内：浅黄橙	小　片	外面に煤付着。
18	004－02	縄文土器体部	SZ4	SK3	―――	外：縄文、突帯 内：ナデ	やや粗～1㎜の小石含む	並	外：灰褐 内：にぶい黄橙	小　片	
19	003－09	縄文土器体部	SZ4	SK3	―――	外：縄文？ 内：ナデ	1～2㎜の小石含む	並	外：にぶい褐 内：にぶい黄橙	小　片	外面に煤付着。
20	004－03	縄文土器体部	SZ4	SK3	―――	外：刺突、キザミ 内：ナデ	やや粗1㎜の小石含む	並	外：灰褐 内：にぶい黄褐	小　片	
21	003－02	縄文土器体部	北壁削り	北壁削り	―――	外：縄文 内：ナデ	やや密1㎜の小石含む	並	灰褐	小　片	
22	004－06	縄文土器体部	SZ4	SK3	―――	外：縄文 内：ナデ	やや粗1㎜の小石含む	並	外：にぶい褐 内：灰白	小　片	
23	004－08	縄文土器体部	SZ4	SK3	―――	外：ナデ、縄文 内：ナデ	やや粗2～3㎜の小石含む	並	外：灰褐 内：にぶい褐	小　片	
24	004－09	縄文土器体部	SZ4	SK3	―――	外：縄文、沈線 内：ナデ	やや粗1㎜の小石含む	並	外：褐 内：にぶい黄褐	小　片	
25	004－10	縄文土器体部	排　土	排　土	―――	外：条線 内：ナデ	やや粗1㎜の小石、金雲母含む	並	灰褐	小　片	
26	004－07	縄文土器体部	SZ4	SK3	―――	外：縄文 内：ナデ	やや粗1～3㎜の小石含む	並	にぶい黄橙	小　片	
27	003－01	弥生土器甕	検出中	検出中	―――	外：凹線、キザミ、ハケメ、ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	やや粗1㎜の小石含む	並	外：灰褐 内：にぶい橙	小　片	外面に煤付着。
28	002－01	土師器鍋	SK1	SK1	口：26.8	外：ヨコナデ、オサエ・ナデ ハケメ 内：ヨコナデ、オサエ・ナデ	やや粗1㎜以下の微砂含む	並	灰白	口縁部1／3	南伊勢系
29	001－01	土師器鍋	SK1	SK1	口：31.0	外：ヨコナデ、オサエ・ナデ ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ、オサエ・ナデ	やや粗1㎜以下の小石、微砂含む	並	灰黄	口縁部ほぼ完存	南伊勢系
30	001－02	土師器鍋	SK2	SK2	口：30.2	外：ヨコナデ、オサエ・ナデ ハケメ 内：ヨコナデ、オサエ・ナデ	やや粗1㎜以下の小石、微砂含む	並	外：灰白 内：にぶい黄橙	口縁部1／6	南伊勢系
31	002－03	青磁椀	SK2	SK2	残存量69.18g	外：ロクロナデ、施釉 内：ロクロナデ、施釉	密	良	オリーブ灰	高台のみ	輸入陶磁。加工円盤。
32	002－02	陶器皿	SK1	SK1	口：8.7 高：1.7	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ、自然釉	やや密2～4㎜の小石含む	並	灰白	ほぼ完形	山皿
33	002－04	土師器皿	SK1	SK1	口：12.0 （推定）	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、接合痕	やや密	並	浅黄橙	小　片	南伊勢系

第2表　出土遺物観察表

写　真　図　版

現地説明会（1996年11月16日）

図版 1

調査区全景（西から）

B地区作業風景（北から）

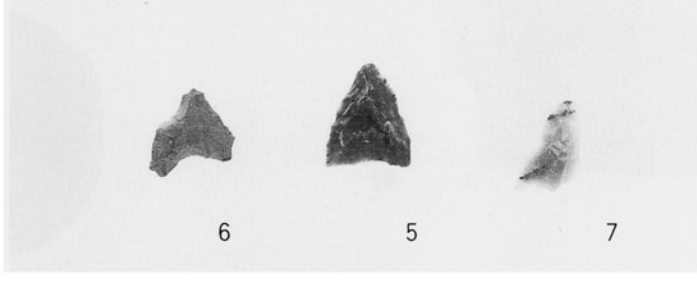
B地区作業風景（東から）

図版３

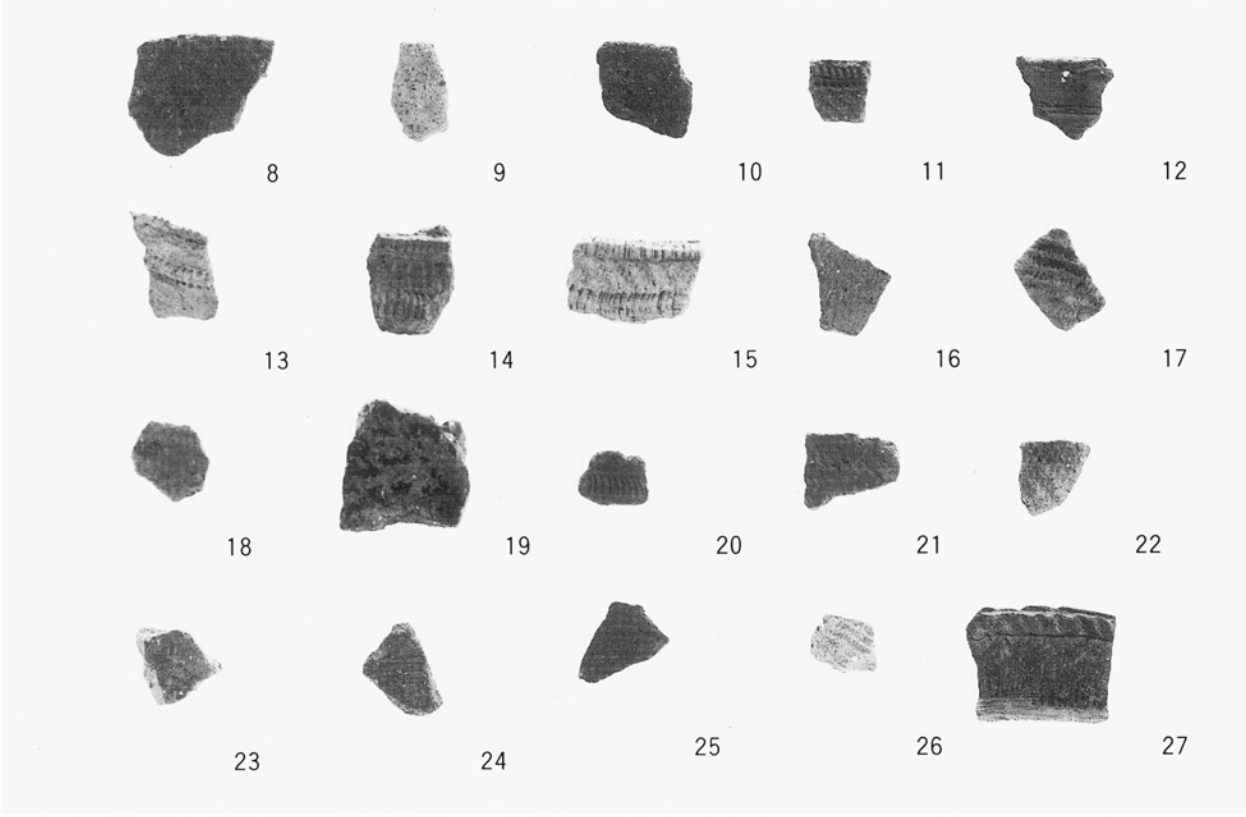
Ａ地区調査後全景（東から）

Ｂ地区調査後全景（北から）

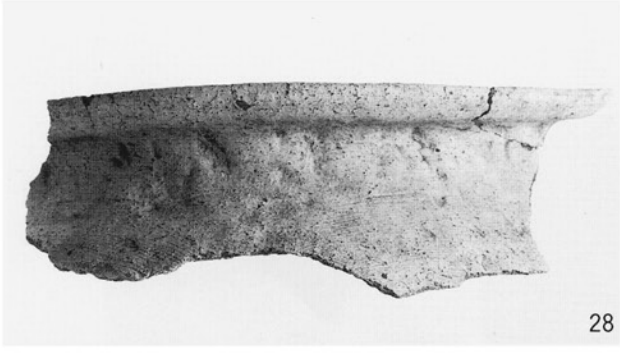
掘立柱建物 SB12 （北から）

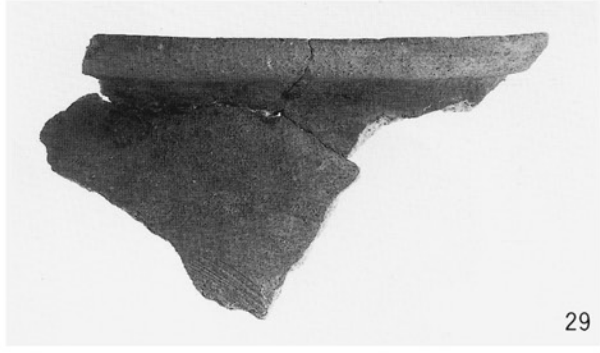


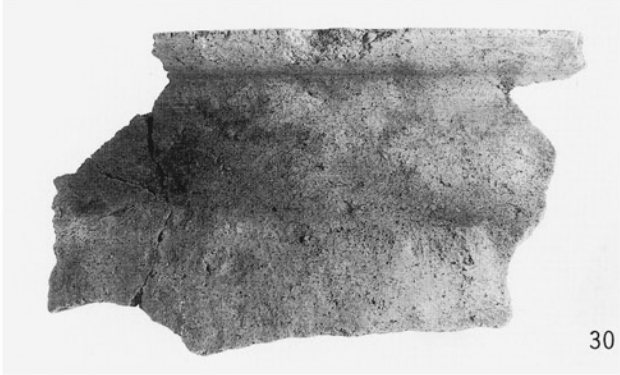
出土遺物（1） 石器類



出土遺物(2) 縄文土器 (8～26)、弥生土器 (27)







出土遺物(3) 中世土器

報告書抄録

ふりがな	ゆじり いせき はっくつちょうさ ほうこく
書名	湯後遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	157
編著者名	木野本 和之
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－03 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 05965－2－1732
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ゆじりいせき 湯後遺跡	たきぐんみやがわむらこたき 多気郡宮川村小滝 あざゆじり 字湯後	24445	17	34度 20分 32秒	136度 17分 25秒	19951028 ～ 19951122	350m²	平成8年度国道422号線特定交通安全施設等整備事業（第1種事業）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ゆじりいせき 湯後遺跡	散布地	縄文前期末	倒木痕 1	縄文土器、石錘、石鏃 敲石、凹石	土器は大歳山式並行期
	散布地	弥生中期		弥生土器（甕）	第Ⅲ様式
	集落跡	鎌倉	土坑 3 掘立柱建物 1	土師器皿、土師器鍋、 青磁椀	

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　157

湯後遺跡発掘調査報告

－多気郡宮川村小滝字湯後所在－

1997年 3月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　東海印刷株式会社